

推薦文

伊勢功治著『北方の詩人 高島高』

2020年12月31日

思潮社書籍編集長

藤井一乃

瀧口修造を輩出する富山は、戦前の前衛詩運動を語る上で欠かせない、重要な位置を占めている。慶應義塾大学で西脇順三郎のもとに集まった学生たちによる、日本初のシュルレアリスム詩誌「馥郁タル火夫ヨ」に三浦孝之助(上市町)、その後につづく雑誌「衣裳の太陽」に三浦、山田一彦(福野町)が参加していることは、富山の文学研究においてよく知られている事実かもしれない。その三浦が魚津中学に赴任、その指導を受けた高島順吾が滑川高校に赴任して、神保恵介、水橋晋を指導し後進の育成に尽力、その後の富山の詩に大きな影響を与えた。そのことと、今から紹介する高島高は直接間接に関係しており、富山という土地の文学的土壌の底力を感じさせる。

高島高は、1910年、中新川郡滑川町(現・滑川市)生まれ、中学時代から詩作を始め、日本大学文科に進んで上京するものの、家業の医者継ぐべく、昭和医学専門学校に再入学。1933年、北川冬彦、佐藤惣之助、萩原朔太郎らが選者を務める詩のコンクールに入選したことで、詩人として華やかと言っていいスタートを切っている。東京では医師を志す傍ら、プロレタリア作家の越中谷利一、高見順、山之口獏らと親交を深めた。

高島を見出した北川冬彦は、1924年に満州で、北園克衛と「垂」を創刊、当時のモダニズム、短詩運動をリードする存在であった。その後、1928年に、春山行夫、西脇順三郎、北園克衛らと「詩と詩論」創刊に参加。つねに当時の詩壇の重要な存在であり続けたが、のちこの「詩と詩論」の芸術至上主義と袂を分かち、ネオ・リアリズムを掲げて「麴麴」、第二次「時間」と活動の中心を移していくようになる。高も、その北川の理念に共感、同調していく。高島は、1938年に第一詩集『北方の詩』(1935年に私家版で同名の詩集を刊行している)を、鳥羽茂という人物が手がけるボン書店から出版。ボン書店は1932年から、北園克衛や春山行夫ら若きモダニズム詩人の、造本にも意匠を凝らした詩集を次々に刊行、数年で姿を消した幻の出版社として知られる。高の『北方の詩』は、このボン書店の最後の出版物で、その点でも高は、この時代を象徴する重要な存在と言える。

その後、1939年に郷里滑川に帰って医師となり、1943年、軍医として南方、シンガポール、ミャンマーなどを転戦したのち、1946年に復員。その後は、富山に帰り、医師として詩人として活動。翁久允との関係も、この頃から始まっている。「高志人」への最初の執筆は1940年3月号。1942年から「高志人」詩壇の選者を務めるなど、1955年に44歳で亡くなるまで続いている。また先に名前を挙げた高島順吾や、若手の詩人たちとの温かい交流も最後まで続いた。

高の詩人としての活動時期は長くない。その短い間に、東京で多くの詩人たちとの知己を得て、富山に帰ってからもその人脈を大切にしながら詩を書き続けた。詩風は、当時のモダニズムの影響を受けながら、内容的には、自身のルーツである富山、「北方」の風土を描き、独自の抒情を築きあげている。行田公園の詩碑にもなっている「続北方の詩」の「剣岳が見え／立山が見え／一つの思惟のように／風が光る」といった表現は、今も富山で暮らす人の心の風景を代弁する名篇ではないだろうか。

今回、瀧口修造を入りにモダニズムの詩に分け入り、その過程で同郷の高島高の詩に出会った著者は、ご遺族から預かった資料を丹念にデータとして記録、整理し、そこから詩人の全体像を描き出している。妻・とし子氏の理解により保管状態の良かった資料には、北川冬彦、高見順、山之口獏、永瀬清子、深尾須磨子といった錚々たる文学者たちからの書簡類が含まれており、そこには、詩人としての高島の人間的な部分もさまざま読み取れるばかりでなく、高と交流のあった文学者の個人研究の傍証としても興味深いエピソードに満ちている。

第二次世界大戦を挟んで価値観が大きく変化するなかで、詩人ひとりひとりの評価もその影響を受けている。とくに詩人たちは、戦争詩による戦争協力の責任を追及され、そのことによって戦後、忘れられた詩人も多い。高もまた富山に帰り、若くして亡くなっていることも影響して、いまはその名を知る者は少ないが、そうした事実も踏まえつつ、いま一度、高の作品を見直してみることで、従来の文学史を立体的に検証することができるのではないだろうか。本書は、そうした文学記述の試みの一端として評価できる。